慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リカアドオの死後（リカアドオ原論解題続編）
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.10 (1927. 10) ,p.1277(1)- 1330(54)
JaLC DOI	10.14991/001.19271001-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19271001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌　第二十一卷　第十號

リカアドオの死後

（リカアドオ原論解題續篇）

小泉信三

一八二三年九月リカアドオはギアトコム・パアクの邸に居て耳に激痛を感じ、一度稍〻輕快なることを得たが終に癒えずして、同月十二日享年五十一を以て逝いた。

經濟學者としてのリカアドオの功過、其學説の當否如何に就いての學者の所見が縱令如何に區々であつても、彼れを以て「十九世紀の最も影響多き經濟學者」（K. Diehl）となすことは略ぼ異論なき所であらう。必しも直ちにリカアドオの學説が多數者の信奉する所となつたと謂ふのではない。之を祖述するにもせよ、修正するにもせよ、或は攻撃するにもせよ、兎に角十九世紀の經濟學的思索の基礎をリ

店舗の新築移轉と
共にすべてが新しく
各物の御注文は是非〻
當店へ御用命下さい
旭屋洋服店
朝倉保太郎
芝區三田四國町七番地
電話高輪三九七一番

各病院眼科
諸大醫御用
慶應義塾大學
病院眼科御指定
正確ナル眼鏡
清野眼鏡店
東京市四谷區麹町十三丁目
電話四谷四五四三番

カアドオはなつたと謂ふのである。一個の系統ある經濟學はアダム・スミスに依て創建せられたとは屢々人のいふ所である。併し乍らスミスの大才は綜合や集成に適して、統一ある考察首尾一貫せる推究には適しなかつた。國富論全五篇中にスミスの時代及び其以前に於ける經濟學的研究の成果が汎く包容せられてゐることは充分認めなければならないが、個の理論的系統といふ程のものがスミスに依て確立せられたといふには、猶ほ多少の躊躇なきを得ざらしめるものがある。從つて個々の場合個々の問題に對して彼れが下す判斷は、往々對症療法的であつて、それが彼れの思想全體と有機的な聯絡を保たぬことが珍しくない。學者は無數の前後撞著を彼れの著作中に指摘し得るのである。

予は嘗て論斷して「理論家としてのアダム・スミスの病は其推究の出發點の謬れることではなくて、其出發の際に於ける立脚地を固執せざることにある。自家の見地と相容れぬ觀察を峻拒する潔癖を有せぬことにある。彼れの健全なる常識と收受力に富める頭腦とは終に彼れの透徹一貫せる理論家たることを妨げた。理論家としての彼れは恐らく半途彷徨なる評語を避け得ぬものであらう。故にアダム・スミスの後には必ず其系統中に存する矛盾を除き曖昧を去り、雜駁を整理するものが出なければならぬ」と言つた。リカアドオは即ち正に其人であつた。

リカアドオはスミスとは此點全然趣きを殊にする。彼れは渾然たる一個の全體を成す理論系統を樹てた。前に予は、リカアドオの原論が一部の著書として體裁の甚だ整はざるものであつたことを述べた。此點に關しては彼れは確に甚しい不用意の責を免れないのである。併しそれは主に著述の體裁に關することであつて、リカアドオの思想其者に就いていへば、それは全き一體を成して我々に與へられて居る。彼れが人類の經濟生活を考察する其の考察には完全なる統一があり、其考察は首尾一貫し、個々の法則は考察の全體と有機的關係を保つて全體の爲めの缺くべからざる部分を成して居るのである。彼れに取つて與へられたものは、耕作の進むに從つて收穫の遞減する土地と、生活に餘裕ある限り其限度まで增殖せんとする人口とであつた。アダム・スミスの經濟思想には理神論(Deism)に發する形而上學的基礎があつた。世界は世界以上、世界以外に存する神の創造する所のものであつて、一度び神に依て與へられた法則に服從し、機械的に其の定め

られた軌道に沿ふて運動する。然るに、彼の「偉大なる仁愛全智の實在」は、其の被創造物の完成と幸福とを實現せんとの目的を以て世界を創造し、又其の爲めに諸々の法則と秩序とを定めた。人間の本能や衝動も亦た此目的を以て賦與せられたものであるから、人間は單に其の自然的衝動の發動に從ひさへすれば、自ら期せずして自己一身の幸福と共に全體の維持、完成、幸福を促進する。これが即ち神の欲すること、創造計劃に定められるゝことであるといふのであつて、これが彼れの「自然的自由の制度」の基礎となつた。然るに其天賦、素養、境遇上、極めて非哲學的なるリカアドオには、絶えて此種の形而上學の形迹を認めることは出來ぬ。彼れは彼の無限に增殖せんとする人口を產出力有限なる土地の上に棲まはせ、全然形而上學的倫理學的考察を離れて、偏へに因果的に其結果を考察したのである。

人口增殖の原理に由る勞働者相互間の競爭の爲め、勞働者の賃銀は持續的には其慣習的生活費以上に上ることが出來ぬ。土地の收穫が此賃銀を超過すれば、其處に資本利潤がある。農業に投ぜられた資本と此利潤との比率が一般的に一切產業の利潤率を定める。利潤が資本の蓄積を促し、資本の蓄積は勞働需要の增進で、賃銀を騰貴せしめるから、人口の增加、食物に對する需要の增進が起り、是に應ずる爲め新に未耕の土地に資本を投じても、或は既耕の土地に累ねて資本を投じても、其收穫は舊に比して減少する。此の減少した收穫から賃銀を控除した餘剩即ち利潤は減少する。一般的利潤率は減少する。舊の土地收穫から賃銀と此の減少利潤との和を控除した餘剩が地代である。更に資本が蓄積せられ、更に人口が增加すれば、更に產出力劣れる土地を耕さなければならぬ。即ち利潤率は更に下落し、それ丈け既耕地の地代は騰貴するのである。人口愈〻增加して利潤率は愈〻下降し、地代は愈〻騰貴するのである。利潤率が下降して或程度以下に降れば、刺戟がなくなつて資本の蓄積が廢せられ、勞働に對する需要の增進も已み、人口增加の刺戟も消滅して、人は最早何等の發展なき「靜止狀態」に到達する。さて物の交換價値は、その人力を以て生產し得るものなる限り、其生產に要せらるゝ勞働の賃銀と資本の利潤との合計に由て決せられる。從つて利潤率の高低は、比較的生產に時間を要すること多きものゝ價値に一層影響するから、利潤率が下落すれば其生產上比較的高價にして耐久力大なる機械を使用する貨物は他に比して下落し、

利潤率が上進すれば其正反對の結果がある。

これがリカアドオの思索の結果の大要である。而してリカアドオが其思索をなすに當つては、一時的現象を無視して事物の本則的眞相を求め、且つ其理論を述べるに當つて、大膽に事實的細目の省略を敢てしたことは、讀者に對する印象を殊に深からしむる所以であつた。斯くして十九世紀經濟學の基礎が定められた。

リカアドオの影響といへば、彼れの通貨論とピイル（Sir Robert Peel）の英蘭銀行法改正と、彼れの自由貿易論と穀物法撤廢運動との事も擧げなければならぬが、茲には單に彼れが經濟學の發達其者に與へた影響のみを考察する。而して其影響は、姑らく之を分つて二つにすることを便とする。リカアドオが

市民經濟學に與へた影響と

社會主義經濟學に與へた影響

がそれである。

リカアドオ病歿の際ジエエムス・ミルはマカロックに與へた書簡中に後者と已れ自身とがリカアドオの「二人の―唯二人の―純粹なる門弟」だと言つた。此外に猶ほリカアドオの原論を讀んで鴉片中毒の昏睡から喚び醒まされた、才學非凡なるド・クインシイがある。彼れは始めてリカアドオの原論を讀んだ時の事を記して斯う言つて居る。「此の深遠の書が果して眞に十九世紀の驕がしい繁忙の間に書かれてゐたのであるか。一英國人、而かも大學の人ではなくて、商人として議員としての心痛に壓迫せらるゝ一英國人が、歐羅巴全土の大學と一世紀の思索とが一毛幅を進歩せしむることをもなし得なかつたものを成し遂げたといふことが、果してあり得た事であらうか。其以前の學者等は、事實細目及び例外の非常な重量に壓し潰され掩蔽せられて居つた。リカアドオ氏は材料の混沌たる闇の中に箭の如き光りを射た諸法則を、アプリオリに悟性其者から演繹したのである。而して斯くして從來試驗的議論の蒐集に過ぎなかつたものを、今始めて永久的基礎の上に立つ、比例正しき一科學に建造した。」

此三者はリカアドオの所說に最も忠實なるものであつた。（James Mill, Elements of Political Economy. 1st ed. 1821.―J. R. McCulloch, The Principles of Political Economy; with a

Sketch of the Rise and Progress of the Science. 1st ed. 1825.—T. De Quincey, Dialogues of Three Templars, 1824.—Logic of Political Economy. 1844.）

右の三者に次いで擧ぐべきものは、シイニオル及びジョン・スチユアアト・ミルである。而して其のスチユアアト・ミルが一八四八年其經濟原論の初版に公言して、價値の法則には、幸にして最早今日若しくは將來の學者が解決すべき問題は一も存せぬ、「此主題の理論は完全である」といつたことは、有名な事實であるが、此の既に完成したと稱せらるる價値理論は、即ちリカアドオの價値論にシイニオル、ミル等が若干の修正を加へたものに外ならぬのである。既述の如く、リカアドオの價値論は一物の交換價値を主として決するものは、其生産に費さるべき勞働量であるが、嚴密にいへば、勞働量のみではなくて、勞働量と生産の着手から其完成販賣までに經過する時間とであると說いた。換言すれば、一物の價値は其生産費に由て左右せられ、生産費は賃銀と利潤とを以て合成せらるといふのである。今シイニオル、ミルがリカアドオに加へた修正といふのは、價値論をリカアドオ自身の場合に於けるよりも更に少しく勞働價値說に遠ざからしめて、その生産費說たるの面目を一層明確ならしめたものであつた。

一貨物生産費を構成するものは、賃銀と利潤とであるといふ。賃銀は無論勞働なる犧牲に對する報酬である。彼の報酬を支拂はなければ、此犧牲を購ふことが出來ないのである。然らば利潤は何物に對する報酬であるか。リカアドオは二種の貨物に費さるゝ勞働量は一對二の比例を保つてゐても、生産完了、生産物販賣までに經過する時間が同一でなくて、勞働を要すること多きものが又時間を要するとも多いものとすれば、二者の交換價値は一に對する二でなくて、價値多き方のものが市場に齎さるゝ迄に經過するより、長き時間を償ふ爲め多少是以上となる」と言つて居る（既出）。此の「是以上」なるものは、即ち利潤である。併し時間に對する賠償といふ言葉は嚴密を缺いて居る。賠償は實は時間其者に對するものではなくて、一定時間中或事を忍ぶに對するものでなくてはならぬ。其の忍ばるゝとは何であるか。シイニオルは之に對して制欲（abstinence）なる新術語を鑄造したのである。彼れに從へば、制欲とは、「人がその支配し得るものゝ不生産的使用を節し、若しくは故らに直接の結果の生産を捨てゝ、遠き將來の結果の生産を擇ぶ行爲」の謂

である(W. N. Senior, Political Economy. 3rd. ed. 1854(Encyclopaedia Metropolitana. 1836)p. 58)。

一物の生産費は、勞働と此の制欲とを以て成るものである。勞働に對する報酬が賃銀なると同じく、制欲に對する報酬たるものは利潤である。而して完全なる競爭の行はれるところでは、諸貨物の價格、即ち貨幣を以て言ひ現した價値は、其物の生産費を中心にして旋回する。「若し其價格にして是よりも下降すれば、其生産に携はれるものゝ賃銀又は利潤は、生産の繼續せられんが爲めには忍ばねばならぬ勞働及び制欲の平均報酬以下に下降せざるを得ぬ。從つて、やがて供給の減少の爲め生産物の價値が引上げらるゝ迄、生産は中止若しくは短縮せられる。又若し價格にして其生産費以上に騰貴すれば生産者は必ず其犧牲に對する平均報酬以上のものを受けるに相違ない。此事が發見せらるゝや否や、資本と勞働とは、此假定上、異常の利益を提供する此用途に向つて流れ、彼の前に買手であり、若しくは買手の爲めに代理した人々は、自ら生産者に轉じて、遂に供給の增加が價格と生産費とを均しからしむるに至る」のである。(p. 101)。

スチユアアト・ミルも此の制欲なる術語を採用し、利潤を以て是に對する報酬たるものとした(Principles of Political Economy (1st. ed. 1848). Edited by W. J. Ashley, 1909. p. 405)。生産費と價値との關係に就いて說く所も略ぼ同軌に出でゝ居る。抑も一物の價値とは、之と交換せらるゝ他の或物若しくは一般の物の量の謂であるが、一物が價値を有せんが爲めには、二條件の具備することを要する。利用あること及び獲得上に困難あることがそれである。獲得の困難といふ點から見れば、貨物には其供給量の絕對的に限定せらるゝものと、勞働と出費とによつて際限なく生産し得るものと、生産によつて供給量を增すことは出來るが、此の生産增加の爲めに投ずべき費用は比例以上に多きを要するものとの三種がある。供給量の限定せらるゝ貨物に在つては、其價値は需要供給の平均に由て決せられる。任意增加し得べき貨物に在つても、其の一時的の價値又は市場價値は同じく需要供給に由て決せられるが、貨物には此外に、市場價値の旋廻中心たる自然價値若しくは自然價格なるものがある。一貨物の自然價格を定めるものは、其貨物の生産出費と利潤、若しくは賃銀と利潤とである。而して貨物の市場價格をして久しく其自然價格より隔たること能はざらしめるものは、利潤率の平均である。若し一貨物の價格が

其生産者に普通以上の利潤を收めしめる程に高ければ「此の非常利益に參加せんが爲め資本は突進し來り、此貨物の供給を增すことに依て其價値を下落せしめる」のである（p. 452）。最後に生産に依て供給量を增すことは出來るが、それが爲めには比例以上の費用增加を必要とする貨物に一つては、其價値は現在最も不利なる事情の下に於ける生産費が之を定め、同じ貨物にして是よりも有利なる事情の下に生産せらるゝものは、此の費用の差額に等しき地代を生ずるのである。而して「地代は之を生ずる貨物の生産費中の要素たらざるものである」

右述の如くであるから、既にリカアドオの言つてゐる通り、生産に依て供給量を增し得る貨物の價値は、生産上に費さるべき勞働量に增減はなくても、生産完了に要する時間の長短の爲めに變動する。ミルは其價値論の要旨を約說する中に斯ういつて居る。「若し二物の一方が平均上他方よりも大なる價値を支配するならば、其原因は必ず其生産により、大なる勞働量か、或は永續的に一層高率の報酬を受ける種類の勞働を要するとか、或は此勞働を支へる資本若しくは資本の一部分を一層長期に亘つて前拂しなければならぬことか、或は最後に生産が永續的に高率の利潤を以て償ふことを要する何等かの事情を伴ふことに存せねばならぬ。是等諸要素中生産に要せらるゝ勞働量が最も重きを占める。爾餘のものゝ效果は、何れも輕微ではないが、是よりも小である」（p. 480）。

ミル等の價値論がリカアドオのと異なる點の一は、特定業に於ける賃銀率の異同が生産物の價値に影響することを認めた所にある。元來投入勞働量が生産物の價値を支配するといひ得るのは、資本家が勞働者を雇傭して生産を行はしめる今日の社會に於ては、投入勞働量が資本家の賃銀支出額に現れるからである。賃銀支出額が增大したのに生産物の價格が騰貴しなければ、利潤は普通率以下に減少すべき筈であるから、其處で供給の減少、價格の騰貴が起るといふのである。故に投入勞働量は如何に變動しても、それが資本家の賃銀支出額に現れて來ぬ限りは、生産物の價値には何等の影響はない筈なのである。其代り又、投入勞働量に變化はなくても、特定勞働者の賃銀率に昇降があり、從つて其雇主の賃銀支出額に增減が起れば、價値は變動するのが當然である。リカアドオは賃銀の騰落といふ場

合には常に其普通率の變動のみを意味して、特定種類の勞働賃銀の單獨變動を問題にしなかつたやうに見受けられる。ミルは之に反して、既に右の引用にも見えてゐる通り、「諸貨物生産の爲めに必要なる勞働の相對賃銀が其價値を動かすことは、正に勞働の相對量に同じ」きことを認めたのである。例へば、高率の賃銀を以て酬ゐらるゝ熟練勞働の生産物が賃銀低き不熟練勞働の生産物の大なる數量と交換せらるゝことは、此理を示すものである。

ミルに次いではケルンズ（J. E. Cairnes）が出て、其の所謂不競爭團（non-competing groups）の說に由て投入勞働量と生産物の價値との關係を更に一層稀薄ならしめた。元來勞働者相互間に完全な競爭が行はれてゐれば、勞働なる犧牲と賃銀なる報酬との關係は均一に歸して、犧牲が重くて報酬が薄く、犧牲少くして報酬が厚いといふ不平等はあり得べからざる筈である。然るにケルンズに由れば、勞働者相互の間には完全なる競爭は行はれず、從つて犧牲に對しての報酬率には厚薄がある。それは勞働者の間には最下級から最上級に至る迄の間に、例へば（イ）無熟練勞働者（ロ）工匠鍛工石工等（ハ）機械及び土木技師眼鏡師時計工等（ニ）學者藝術家辯護士等の如き幾段かの階層があつて、同一階層に屬するもの相互間には競爭が行はれるが、異なる階層は相互に不競爭團を成し、其間の境界を踰えることは不可能ならぬ迄も通常は困難であり、從つて假りに上層所屬員が如何に破格の好報酬を得てゐても、下層の人は往つて競爭して之を引下げるといふ譯に行かないからである。（Some Leading Principles of Political Economy Newly Expounded, 1874）

ケルンズも勞働と制欲とを以て貨物の生産上に忍ばるゝ犧牲となし（此外に「危險（リスク）」をも擧げてゐるが、其に就いては僅に數言を費すに止めて居る）賃銀と利潤とを以てそれ〴〵之に對する報酬たるものとなすことシニオル、ミルと同樣である。若し勞働者相互間、資本相互間に夫々完全な競爭が行はれるならば、賃銀と利潤とは各々勞働及び制欲なる其犧牲に比例し、從つて賃銀及び利潤の源泉なる生産物の價値は、又其生産費に比例する譯である。然るに資本間には競爭が行はれるから、制欲と利潤との關係は平均するけれども、勞働者相互には前記の階層の競爭を妨げるものがあるから、價値と生産費との一致も亦た妨げられざるを得ぬ。從つて、例へば卓子と錠前と、或は晴雨計と時計とといふやうに、同一階層に屬する勞働

者の生産物相互は其生産費に比例して相交換せらるべきも、卓子と時計と錠前と晴雨計とに至つては然らずして、晴雨計又は時計の價格は、卓子又は錠前の價格に比して生産費の比例以上に高きに居るべき筈である。即ち斯の如く、生産費の法則は「普遍的に如何なる階級の貨物の價値をも支配するものではなくして、或貨物の或交換に於ける價値を支配する」に過ぎないのである。

ケルンズに依て斯く生産費説の適用範圍が制限せらるゝに至つて、勞働費用と生産物の價値との關係は、愈〻稀薄なるものにされた。既に論じたやうに、素とリカアドオの價値論は利潤率平均の認定の上に立てられて居る。資本利潤率は常に平均せんとするものである。而して利率潤が平均すれば、貨物相互の交換比率は生産費相互の比率に一致するといふのである。而して此場合生産費といふのは、實は資本家の生産出費（支出）に外ならぬものであるから、眞實の生産費が價値を支配するといふには、眞實の生産費が資本家の生産出費に一致、少くも比例することを前提しなければならぬ。然るに勞働者間に行はれる競爭が完全でなければ、同一量の勞働が異なる賃銀を以て酬ゐられるといふことが起ることは右述の通りである。そこで、各資本家皆其支出資本に對して同一率の利潤を收めるとしても、生産物の價値は必しも勞働といふ犧牲、制欲といふ犧牲の合計量に比例するとは限らない。貨物の價値を支配するものは、生産の爲めの犧牲其者なる生産費（cost）ではなくて、此犧牲を購ふ爲めに資本家が支出する金額、即ち生産出費（expenses）である。勞働と制欲とではなくて、賃銀と利潤とである。而して利潤が制欲に比例することは略ぼ認められて居るが、勞働と賃銀との權衡に妨げのあることは上述の如くであるから、價値は生産費に依て支配されるといふのと、價値は資本家の生産出費に依て支配されるといふのとは、其意味は同じくないのである。リカアドオは、貨物の價値を決するものは其生産に費さるべき勞働量と、生産物が市場に齎さるゝ迄に經過する時間の長短とであるといひ、又貨物の價値を決するものは其物の生産費であり、「貨幣に現されたる生産費は勞働の價値（即ち賃銀）と並に利潤とを意味する」といつて、此の兩命題が同一事を意味するものゝ如くに取扱つて居るけれども、その然らざることは前述する所に由て明かであらう。正しいのは後者であつて、ただ完全なる自由競爭の前提の下に於てのみ前者は後者に一

致し、而してその一致する場合に於てのみ前者は正しいのである。シイニオル、ミル、ゲルンズ等の所說に由て吾々が學び得ることは、結局茲に歸着するものである。併し是等リカアドオ亞流の說は、リカアドオの價値論を覆へすものではなくて、是に修正を加へたに過ぎぬ。リカアドオの生產費說は自由競爭を前提として始めて承認し得ること、たゞ事實上に於ては自由競爭に幾多の障害あることを明にしたに外ならぬのである。併し此事はリカアドオと雖も必しも拒否するのではあるまい。リカアドオの價値法則は、勞働に依て其量を增すことが出來、而して「其生產上に於て競爭が制限なく作用する」ものにのみ適用するものとして說かれた。故に勞働者間の競爭に障害が存して、特殊の勞働者が多少とも獨占的地位を占める場合は、價値法則の適用範圍外に屬するものと解することも出來やう。またさうしなければ彼れの學說は成立しないのである。（原論第一章第二節にリカアドオは品質の異なる勞働が異なる報酬を受けることを論じ、熟練を要する勞働が獨占的地位を占むべきことを認めでもゐるやうだが、其議論は甚だ不明瞭で、彼れの價値論の一缺陷たるを免れぬ。）たゞリカアドオは其生產上に自由競爭の行はれるものが貨物の大部分を占めるものとして立論して居るが、後の學者は此點に於て所見を殊にして居る。生產上の競爭にはリカアドオが認めたよりも多くの障害が存する。これは認めなければならないのである。

然らば存在量の限定されてあるか、然らざるも其生產上に自由競爭の行はれぬ貨物の價値は、何に由て決せられるか。リカアドオはいふ。「是等のものゝ價値は始め其生產に要したる勞働量とは全然無關係であつて、之を得んと欲するものゝ資力と嗜好との變動に從つて變動する。」之を得んと欲するものゝ資力と嗜好とに由て定まるといふことは即ち需要に由て定まるといふことに外ならぬ。然らば、任意に增加せしめ得る貨物の價値は何故に需要に由ては決せられないか。それは供給が需要に追隨して、生產費と離れた價値の存續を許さないからである。故に曰く「諸貨物の價格を究局支配せざるを得ないものは生產費であつて、屢々言はるゝ如く、供給需要の比例ではない。勿論供給需要間の比例は需要の增減に應じて一貨物の供給が或は其豐富を增し、或は之を減ずる時迄、一時其市場價値に影

響し得るものではあるが、併し此結果は僅に一時繼續するに過ぎぬであらう」と（原論第三十章）。而してリカアドオは、供給は躓に接して需要に追隨するものとして立論したのである。故に供給が果して常に需要に追隨するや否やの疑問は措いても、價値は供給需要間の比例に由て決せられるといふことは、決して「屢々言はるゝ如く」價値は生産費之を決すといふことゝ相容れないものではない。價値が生産費に由て決せられるといふのは、生産費が貨物の供給を動かして一貨物の價値をして宛も其生産費に合致せしめるやうな需要供給關係を造り出すといふに外ならぬ。生産費と一致せぬ價値を成立せしめるやうな需要供給關係は、縱令發生しても永續せぬといふのである。故に一物の價値を決するものは、何れの場合に於ても需要供給間の比例であるといつて差支ない。たゞその供給がその人力を以て增減し得る場合には、價値と生産費とが一致する迄或は增加し或は減少するを言ひ得るに過ぎないのである。生産費法則は、需要供給法則に對して一般原則に對する特殊法則の地位に在るものであつて、決して兩者相拒否すべきものではない。リカアドオが價値決定の上に於ける生産費の位置の重きを言はんと欲するの餘り、往々需要供給說を以て誤謬と爲さんとするかの如き口吻を漏してゐることがあるのは、啻に吾々の見地よりして承認し難いのみならず、實はリカアドオ自身の立場からしても、嚴密にいへば容し難いのである。

リカアドオが、貨物には其價値の需要供給の比例に由て定まるものと生産費に由て定まるもの、或は其の稀少性（scarcity）より起るものと勞働より起るものとあるかの如くに說いたのは、語法が正しくない。貨物の價値は皆均しく稀少性に發し、其に關する需要供給の比例に由て定まる。我々が是に附け加へて言ひ得ることは、其の供給量其者、稀少性其者の人力を以て左右すべからざる貨物と左右し得べき貨物とのあることである。需要供給と生産費と、稀少性と勞働とを對立せしむることは、斷じて正しくない。價値が生産費に由て決せられるといふことも、需要供給の理法に由らずには之を說明することが出來ぬ。勞働が價値の泉源であるといふことも、畢竟勞働に由て始めて生産せらるゝものは即ち稀少なるものであるといふに歸着しなければならないのである。此點若し人を惑はしめて、リカアドオは貨物の價値源泉として稀少性以外別に勞働を立てたものと誤解する者が

あれば、罪は彼れの不用意にして性急なる論述法の負ふべきものである。

現代に於けるリカアドオ辯護者たるディッエル(H. Dietzel)が『有用性と稀少性』の公式と『有用性と勞働投下』の公式とは其名は異なるけれども實は一である。蓋し第二の公式に於ては『勞働投下』が擧げられてゐるけれども是に由て擧げらるゝものは『稀少性』の兩原因の一に外ならぬのである。或種の財は、勞働が之を增加することを能はざるを以て稀少である。これがリカアドオの『一種の財』であつて、此場合彼れは稀少の原因を示して居る。大多數の財は成程增加することは出來るけれども、たゞ勞働に由て始めて增加し得べきが故に稀少である。此のリカアドオの所謂『別種の財』の稀少の原因は、勞働其者が稀少なる、其所有量有限なる資料なることを是である。勞働を費すことを要する財は、皆な稀少である」といつたのは、正鵠を得たものである。(Theoretische Sozialökonomik. S. 230)

同じ趣旨の事は、既にシイニオルも言つて居る。一物が價値を有するといふことは、彼れに由れば(一)利用を有し、(二)供給に制限があり、而して(三)讓渡可能なることであるが、最も重きを供給の制限に措き、勞働の投下に由て物に價値あるが如く思はれるのも、實は勞働の供給には制限があるから、從つて其供給に之を必要とする物體は、此必要其者に依て供給を制限せらるゝを以てゞある。併し乍ら、「供給を制限する他の如何なる原因も、一貨物の價値の有效原因たることに於ては、其生產に對する勞働の必要と毫も擇ぶ所はない。」又「供給の制限は、勞働其者の價値に缺くべからざるものであるから、價値の據て立つ條件として、勞働を取つて供給の制限を除外するは、啻に一般的原因に代ふるに部分的原因を以てする所以なるのみならず、指定せられた原因其者に效力を與へる所の原因其者を故らに除外するものである」(p. 24)。

上述の如く、有ゆる貨物の價値は普遍的には需要供給の比例に由て說明されなければならぬものであるが、さて其の需要其者の本質如何といへば、一物に對する需要は其物の吾々の欲望を滿たす力、即ち利用の爲めに起るといふことを必ず言はなくてはならぬ。然るに、價値の說明が需要から利用まで遡ると、古くから學者を惱ました利用と價値と、若しくは使用價値と交換價値との背反の問題に逢着せ

ざるを得ぬ。水は其利用絶大なるに拘らず何故に交換價値悉無若しくは僅小であるか。何故に金剛石は利用僅小なるに拘らず交換價値は甚だ多大であるか。此疑問はリカアドオも之を解いて居らぬ。併し需要供給の關係で價値若しくは價格が定まるといふことは、古來學者の言ひ古るし來つたことである。然らば、同じ物が其供給の增加の爲めに其價値が下落し、供給の減少の爲めにそれが騰貴するといふのは何故であるか。

ヤケルンズがリカアドオの生産費説の適用範圍に制限を加へたと略ぼ同じ頃、他方に於て、スタンレエ・ジエヴンスが「經濟學理論」(W. S. Jevons, Theory of Political Economy, 1871)を著して價値は全然利用に基づくものであるといふ立場からリカアドオ及び其亞流の學説を覆へさうとした。

ジエヴンスの事業は、人間の欲望は通則として之を滿たすに從つて其强度が減退し、遂には皆無とならんとするといふ、極めて平凡なる日常經驗の觀察に出發するものである。既に欲望の强さが滿足に由て減退するものとすれば、其存在量を離れて單に一定貨物の利用といふことは意味をなさぬ譯である。一物の利用とは、之に對する欲望の全く滿たされざる前の利用か、その充分滿たされたる後の利用か。その何れかなるに由て利用の大小は非常に違はなければならない筈である。其處でジエヴンスは、貨物一定量の全部が提供する全部利用(total utility)と貨物の一定量の最終增量の利用、即ち最終利用(final degree of utility)とを區別した。人間は水なくしては生存することが出來ぬ。水の(全部)利用は絶大である。併し平常に於ては、吾々は殆ど欲する丈けの水を飲用使用して居る。從つて其の(最終)利用は殆ど皆無に達して居る。而して貨物と貨物との交換比率は、此の最終利用に由て決せられる。「任意二貨物の交換比率は、交換終了後に於ける二貨物の最終利用の比と反比例をなす」のである。そこで利用絶大なる水が交換價値を有せぬといふ事實が説明されるのである。

ジエヴンスは「價値は全然利用に基づくものであるといふ新奇の説」に到達したものと自信した。彼れの信ずる所に由れば、此の新奇の説は、リカアドオ及び其亞流の説と全然相容れぬものである。乃ち彼れはリカアドオを評して、經濟科學の車輛を邪路に走らしめた有能ではあるが迷惑に陷れる人(able but wrong headed man)な

いひ、正統派リカアドオ派の代表學者に理解せられなかつた爲め幾多の創見ある學者の著作中に含まれた貴重なる暗示の顧みられざるに終つたことを慨嘆しては「斯の如き事情の下にあつては、曖昧なる通説を繰返して滿足せる此の單調なる現狀を破壞するのみにても優に一事業たるものなり、舊きに代る新しきものは假令誤謬なりとも猶ほ歡迎すべし」とまで言つた（拙譯ジエヴンス「經濟學經理」三一〇九頁）。

併し乍らジエヴンスの「新説」は、果してリカアドオの學説とこれ程迄に相容れぬものであらうか。思ふに決してさうではない。ジエヴンスの學説は決してジエヴンス自ら信じた程に革命的なものではないのである。彼れはいふ。「今日行はるゝ所の説に從へば、價値の起因は利用よりも寧ろ勞働にして學者の中には勞働は價値の原因なりと明言する人すらあり。予の主張する所は之に反す。完全なる價値の理論に到達せんとならば、貨物の所有量に基づく利用變動の法則を探求するより外に其途なし」と。併し乍らリカアドオは、若し吾々にして強いて其の不用意の發言に拘泥しさへしなければ、決して價値が勞働から發生すると思つては居らぬ。貨物間の現實の交換比率は、需要供給の關係に由て定まるものではあるが、勞働投下に由て其供給量を增加し得るものにあつては、供給が直ちに需要に追隨して、交換比率が費さるゝ勞働量に比例するやうな需要供給關係を造り出さずには措かぬといふに過ぎないのである。ジエヴンスは勞働が屢々價値を定めるかの如く見受けられることは認めるが、「それはたゞ間接の方法に於て、即ち貨物の利用を其供給の增加若しくは制限に依て變動せしむるに依て然るを得るのみ」といひ（拙譯二頁）、又生產費と價値との關係を述べて

「生產費は供給を定む、
供給は最終利用を定む、
最終利用は價値を定む」

と謂つて居る（拙譯一八三頁）。併し乍らこれはリカアドオの立場から見て、リカアドオ自身それを理解すると否とを問はず、少しも容認し難いことではないのである。故に予は茲に特に力説して謂ふ。ジエヴンス並に此と時を同うして略ぼ同軌の説を唱へた維那のカアル・メンガア（Carl Menger）及び其衣鉢を繼ぐ墺イヂアフリツヒ・フオン・ヴイーザア（Friedrich von Wieser）ボエム・バヴエルク（Eugen von Böhm-Bawerk）等の形成する所謂墺太利

學派の價値學說は、決して革命的な新說ではないと。それは從來の價値論に於て、與へられたものとして承認せられてゐた貨物供給量の增減と需要强弱との關係に就いて周到綿密な考察を加へたに過ぎぬものである。それは從來の價値論の或一面を精確にし、且つ豐富にすることは出來た。併し決して既存の價値論と相對立すべきものではない。たゞそれを補ふべきものたるに過ぎぬ。たゞ貨物の價値を決するものは何處迄も需要と供給と或は利用と稀少性とであつて、勞働又は生產費は、此の供給又は稀少性を左右するものとして始めて價値に影響するのであるから、利用學說は生產費說に對して特殊に對する一般の地位に在ることを記憶しなければならぬ。

以上述べた所に由て左の如く言ふことが出來る。

有ゆる貨物の兩極端に位するものは、一方に於ては、例へば古名工の作品の如く、其存在量の絕對的に限定せられてあるもの、他方に於ては、需要の增減と共に供給の即刻同一比例を以て增減し得るものである。前者の價値は利用學說を俟つて始めて說明することが出來る。後者の價値も同じく利用學說に依て說明せられはするが、併し吾々は其以上更に進んで、貨物相互の交換比率は常に其の各自の生產費に比例するといふことが出來る。而して此の兩極端の中間に無數の段階があつて、一貨物はそれが後者に近きものである程其價値は多く生產費の影響を受け、前者に近きものであるほど生產費の支配から獨立する。併し供給の需要と共に即刻增減し得るといふものは、事實上絕無ならぬ迄も僅有であるから、生產費の價値に對する支配が現れるのは、多くの場合時間を要する。故に費用說と利用說との兩立を認め、費用と利用との何れか一方が單獨に價値を決定するといふ不合理は、鋏の双刃の何れか一方が單獨に物を截斷するといふ不合理に等しいといふマアシャルは、結論して「……通則として、吾人が考察しつゝある期間が短ければ短き程我々は大なる注意を價値に及ぼす需要の影響に分たなければならぬ。又期間長ければ長き程價値に對する生產費の影響は益々重要となるであらう」といつた（A. Marshall, Principles of Econonics 7th ed. p. 350）。これがリカアドオの價値學說の補充せられ修正せられて到達した現在の狀態である。

所謂市民經濟學に於けるリカアドオ價値論發展の趣きは上述の如くである。社會主義者の間に於ては、同じ價値論は更に別樣の發展をなした。

リカアドオは諸貨物の價値は其生産に費さるゝ勞働量に由て決せられると說き、或は價値の泉源が勞働なるかの如くにも說いた。此價値論は社會主義者に依つて、價値は勞働の所産である、勞働せざる地主資本家の所得たる地代や利潤は、勞働に依て造られた價値の搾取を意味するものであるといふ、搾取論、餘剩價値論の基礎にせられた。「近世社會主義は、其流派の如何を問はず、そのブルジョワ經濟學から出發して居る限り、殆ど例外なくリカアドオの價値論に結び付いてゐる」（エンゲルス）のである。

先づリカアドオに據つて搾取論を立てたものは、或は「リカアドオ派社會主義者」と稱せらるゝ、ヰリヤム・トムソン（William Thompson, Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth most conducive to Human Happiness. 1924）トオマス・ホジスキン（Thomas Hodgskin, Labour Defended against the Claims of Capital etc. 1825）ジョン・グレヰ（John Gray, Lecture on Human Happiness. 1825）フランシス・ブレヰ（J. Francis Bray, Labour's Wrongs and Labour's Remedy. 1838-9）等であり、ロバアト・オオエンにも亦たリカアドオの影響は認められるが、影響は獨り英國内にのみ限らず、佛蘭西のプルドン、獨逸のロオドベルトス、マルクス皆何れも或意味に於てリカアドオから出發したものだといつて差支ないのである。

價値は勞働の所産であり、地代や利潤は價値の搾取によつて成立するものだといふことは、即ち勞働者は其勞働の所産全額を收得せぬといふことを意味する。茲に於て、勞働者をして其所産の價値全額を收得せしむるには如何にすべきやが問題となる。社會主義者中には、新しき通貨制度の案出によつて生産物の互に等價値なるものが交換せられ、從つて勞働者が其の生産に投入しただけの價値を報酬として收得するやうにしようとしたものが少くなかつた。其方法の細目は區々であるが、要するに一機關を設けて、勞働者が一物を生産すれば、券面に其生産に投入せられた勞働時間を表示する紙片を以て之を買取り、該勞働者をして其紙幣即ち勞働貨幣を以て、同じ機關から他の勞働者の所産にして同一勞働時間を代表するものを購入することを得しめようといふに外ならぬものである。

此の勞働貨幣を立案したものには、英吉利にロバアト・オオエン、佛蘭西にプルドン、獨逸にロオドベルトスがある。

プルドンは「經濟的矛盾の體系」（別題貧困の哲學）（P. J. Prondhon, Système des contradictions économiques ou philosophie de la misère. 1846）の中に言つた。「價値なるものは、生産者等が分業と交換とに依て組織する社會に於て之を見るに、富を形成する生産物の比例關係であつて、而して人が特に一生産物の價値と稱するものは、此の生産物の一般の富に對する比例を貨幣の數字で示す一形式なのである。利用は價値の根基をなし、勞働はその割合を確定し、價格はこの割合を示す表現である」と。然るに、勞働は價値の比例を定める原理だといふことは、プルドンに取つては單に事實の表明たるに止まらずして、又其理想たるものであつた。即ち「進歩の目標、社會的幸福の條件並に形式、經濟學の始めにして且つ終り」であつた。プルドンは此理想を實現する方法として交換銀行（banque d'echange）又は庶民銀行（banque du peuple）を設立して、その發行する交換劵に依て生産物相互の生産出費と勞働量とに準ずる交換を實現せしめようとしたのである。

ロオドベルトスも亦た、一方に於ては、貨物の市場價格は必しも常に其勞働費用には一致せぬが、自由競爭の行はれるところでは結局之に歸着せんとするものだといふ他面に於て、勞働を以て價値の尺度たらしむるは最も正義に適へることであり、又既に實現せられた事實ではなくて將來實現せらるべき理想であるといふことを度々の機會に說いてゐる。彼れは既に一八四二年の公刊處女作の中に（C. Rodbertus, Zur Erkenntnis unsrer staatswirtschaftlichen Zustände. 1842. V. Theorem）「財の價値が常に勞働費用額に等しき狀態の下に於ては『流通手段』並に『價格尺度』としての一切の要求を充たして、而かも自ら物財にあらず、又今日の紙幣の如く物財を代表することをもせざる新しき貨幣を造ることが出來る」といつた。此立案は後に彼れの「標準勞働日」（Der Normalarbeitstag. 1871）と題する小冊子の中に詳しく說明されたのである。

勞働貨幣の案は、ロオドベルトスにあつては單に理論的立案たるに止まり、プルドオンの庶民銀行は一八四九年兎に角設立はされても開業に至らずして閉鎖されたが、ロバアト・オオエンは、一八三二年、其の「勞働交換銀行」を設立し、約二年にして

閉鎖を餘儀なくせられた。此失敗の經過には勞働價値說批評の上にも參考とすべきものがある。一物の生產者は其生產物を銀行に交付して之に對して勞働銀行劵を受取り、其の勞働銀行劵を以て自家必需品を銀行に就いて購入するといふのが其原則であつた。例へば革工が二志の原料と十時間の勞働とを費した靴一足を銀行に提供すると、銀行は勞働十時間に對して一時間劵十枚と二志の原料に對して一時間劵四枚（六片（ペンス）を一時間に換算）と合計十四枚を交付し、靴工は此の十四枚分丈け其の所要品を銀行から購入することが出來る筈なのである。併し乍ら、一定枚數の時間劵を交付せられても、時間劵所持者の欲望に適するものが果して此の枚數に相當する丈け銀行に用意があるか否かは疑問である。又實際、銀行は此困難の爲めに閉鎖せられたのである。一定量勞働の生產物を銀行は規定通りの時間劵を以て購入する。併しその物に對する需要はない、他面に於て需要ある品物は供給が足りないといふことが起つて來た。銀行には、勞働は掛かつてゐるが併し何人も顧みぬ無用物又は流行遲れの品物が堆積し、他面必要物殊に原料品の供給が缺乏するといふ事が起つて來たのである。此の缺乏せる原料を吸收する爲め、銀行は加工勞働に對しては時間劵を交付するけれども、原料其者は優待して現金を以て之を購入するといふ變則手段を取ることを餘儀なくされた。斯うなれば、勞働交換銀行は既に理論的に破產したものである、換言すれば、勞働貨幣の實驗は、勞働費用に由て定められゝ物の價格と、需要供給關係に由て定まるその被尊重の程度とが一致せぬ爲めに失敗した。普通市場に於ては、供給の缺乏せる品物の價格が騰貴して其生產が刺戟せられ、需要なき品物の價格が下落して其生產短縮が促されるのであるが、勞働交換銀行に於ては其の本來の主旨上これが許されないので、特に需要あるものを現金を以て購入するといふやうな變則優待法を講ずるの已むなきに至つたのである。

マルクスも亦た、商品價値は其の生產に要せらるゝ勞働量に由て決せられ、勞働に依て造り出された價値から勞働者の賃銀を控除した餘剩が利潤や地代をなすものだと說いてゐる。併し乍ら、マルクスは勞働者が其の創造する價値全額を自ら收得せぬことを不當であるとして、茲に其共產主義の論據を求めてゐるのでは

ない。マルクスの共産主義は、資本的生産方法は必然的に崩壞するといふ認識に基いてゐるのである。彼れの價値論餘剩價値論は、此結論に到達すべき出發點をなしてゐるのであつて、商品價値は勞働に由て決せられ、餘剩價値即ち利潤地代は支拂はれざる勞働を以て成るといふことは、當不當を離れた單に一の事實たるに過ぎないものであつた。價値は宜しく勞働に由て之を定めなければならぬといふのではない。リカアドオの場合と同じく、事實上價値は勞働に由て決せられるといふのである。

商品價値は生産に必要なる勞働時間に由て定まるといふマルクスの命題は、如何にして立證せられたものであるか。マルクスの經濟學説に終始最も大なる影響を與へたものはリカアドオであつて、彼れはリカアドオに其經濟學の基礎を求めたと謂つても好い。此の影響はマルクスがプルドンを駁した「哲學の貧困」（La Misère de la philosophie. 1847）に最も著しく現れてゐる。此時のマルクスは一々リカアドオの疊に據てプルドンを擊ち、殆ど無批判にリカアドオを採用してゐたかの如く見える。此時以後マルクスの經濟學研究は漸次歩を進めて、やがてリカアドオの學説其者に對して幾多の重要なる批判を加へるやうになつたが、彼れの經濟學的思索はリカアドオの容認に出發したといつて差支ないのである。價値論に於ても亦た彼れは始めリカアドオを祖述した。

マルクスは、一商品には其の時々現實の市場價格の外に自然價格があつて、前者は後者の周圍を旋廻して之を一致しようとするといふ、リカアドオの市場價格自然價格論を繼承した。而して此自然價格を決定するものは生産費であり、生産費は直接間接勞働に歸着するから、商品價格が其生産費に由て決せられるといふことは、「一商品の製作に要する勞働時間に依る價格の決定といふことに等しい」といふことになる。（Marx, Lohnarbeit und Kapital. 1849. Neu hrsg. von K. Kautsky. 1906. S. 22——Value, Price and Profit. 1865. Socialist Labour Party Edition. New York. 1919. pp. 37-8）。

是に由てマルクスは、一時的の動搖を抽象して觀察すれば、相交換せらるゝ二商品には同一量の勞働が含有せられて居るといふ觀念、「商品の交換比率又は交換價値に現るゝ共通なるもの」が即ち其價値であつて、此價値の大小は生産に必要なる勞働時間に由て決せらるといふ觀念を得た。而して一度此結論を得た後に、マルク

さはその豫定の結論に到達する爲めに、別の特異なる推究法を試みた。資本論第一章の始めに、假りに小麥一クォタアと鐵二ツエントネルとが相交換されるとすれば之を

小麥1クォタア＝鐵2ツエントネル

なる方程式で表すことが出來る。さて此の兩者が相等しいといふことは兩者間に共通なる或者の同一量が含まれてゐることを意味するものであるが、此の共通なる或者は形狀色彩重量等の幾何學的、物理學的、化學的等の性質ではあり得ないから、結局共通なることは兩者が共に人間勞働の生産物であるといふ一事の外にない。而して此兩者に共通なる社會的實質の結晶として是等のものは價値――商品價値である。一商品の價値は其生産の爲め社會的に必要なる勞働時間に由て測られるといふのがそれである。併し相交換せらるゝ商品には同一量の勞働が含有せられるといふことは、前記の如く、マルクスが既にリカアドオに由て認めてゐた所であつて、彼自身が此の慕溜的推究法に由て始めて勞働量が價値を決定することを發見した譯ではない。又豫め此結論を有することなく、虚心平氣に彼の推究に出發したならば、彼れは恐らく勞働が價値の實質であるといふ結論には到達し得なかつたであらう

商品の價値が生産の爲めの必要勞働量に由て決せらるゝ如く、今日一種の商品に外ならぬ勞働力の價値も亦た之を生産する爲めの必要勞働量に由て決せられる　勞働力を生産する爲めの必要勞働量とは、畢竟勞働者及び家族の慣習的生活必需品の生産に要せらるゝ勞働量に外ならぬ。そこで資本家に勞働力を賣却した勞働者、即ち雇傭せられた勞働者が勞働力の再生産に必要な時間以上の勞働に服すれば、茲に新なる價値の增加が起る。これが餘剩價値である。此餘剩價値が資本家の支出資本に對する利潤となるのである。斯く餘剩價値は、勞働者が勞働力の再生産に必要な程度以上勞働することに依つて發生する。從つて勞働者の生活必要費も勞働時間も共に均一なるものとすれば、雇傭勞働者が多ければ多い程、生み出される餘剩價値は多額となる筈である。然るに生産技術の關係上、資本家が其資本を勞働者雇傭の爲めに支出する部分（可變資本部分）と其以外の原料、道

具、機械、建物等の生産要具に支出する部分（不變資本部分）との比例は、産業の種類に由て一定して居らぬから、一定額の資本の投下に對して造り出さるゝ餘剰價値額は同じからず、從つて各商品が其含有勞働量の比例通りに賣買せられ、一産業部門に於て造り出された餘剰價値が其産業部門の資本家に依て收得せらるゝものとすれば、總資本に對する餘剰價値の比率即ち利潤率は、産業部門に由て一々相異しなければならぬ。併し利潤率に相異があれば、資本は必ず其の比較的低い部門から高い部門へ流動して、利潤率を平均せしめるやうな商品の需給狀態を造り出さなければ已まぬ。斯くして形成せられた需給狀態の下に於ける商品の交換比率は、最早その各々に費された勞働量に一致するものではない。而かもマルクス自身のいふ所に由れば、資本主義的生産方法の行はるゝ今日に於ては、諸商品は其の費用勞働量即ち價値に由らず、支出賃銀及び不變資本消耗額と總資本に對する平均利潤との和、即ち所謂生産價格に應じて相交換されるのである。生産價格がリカアドオ等に於ける自然價格と同じく、時々現實の市場價格の旋廻中心となるのである。

斯く、マルクスに從へば今日では價値を同じうする商品同志でなくて、生産價格を同じうする商品同志が相交換されることを本則とし、而して價値と生産價格とは僅に例外的にのみ一致するのである。そこで生産價格を等しくして相交換せらるゝ二種の商品の一定量を

$$X\,\text{ポンド}=Y\,\text{ポンド}$$

なる方程式に現はして、さて前段の如く、此の兩商品に果して如何なる共通物が存するかとの問を設くれば、前段の推究が正しいものとする限り、吾々は前と同じく、兩者に共通なる等量の或者は勞働以外にはあり得ないといふ解答に達しなければならぬ。即ち一商品の一定量に費さるゝ勞働量は、同じ商品のそれよりも多き（若しくは少なき）數量に費さるゝ勞働量に等しいといふ結論を得なければならぬ。若し此不合理を避けようとして、前の蒸溜的推究法は生産價格に由る交換比率には適用せず、價値通りの交換比率にのみ適用するといふならば、吾々は推究の結果として得らるべきものを、推究の前に得て置かなければならぬ。所詮彼の推究法は、價値の理論を立てる上には何の用をも爲さないのである。

今日商品が價値と一致せぬ生産價格を以て賣買されるのは何故であるかといへば、マルクスの説明によれば資本間の競爭に由て起る利潤率平均の爲めである。そこでマルクス自身及びマルクス主義者の或者は價値通り即ち勞働費用通りの商品交換を妨げるものは利潤率の平均であるから、資本間の競爭といふことさへなくば、商品は價値通りに交換されるのだと謂はうとした。

併し乍ら是はマルクス自身自己の思索の出發點を忘却するものである。前段引用の「賃銀勞働と資本」及び「價値價格及び利潤」の中に、彼れは商品の價格が其生産費（即ち此場合は勞働費用）を其吸引中心とすると説き、是によつて相交換せらるゝ商品には同一量の勞働が含有せらるゝといふ觀念に到達したのである。而かも商品の市場價格が何故に其の勞働費用の周圍に旋廻するかといへば、それはリカアドオの場合と同じく、自由競爭による利潤率の平均がある爲めであつた。「賃銀勞働と資本」の中にマルクスはいふ。「一商品の價格騰貴の結果は何であらうか。多額の資本が繁榮なる産業部門に投ぜらるゝであらう。而して此の特に有利な産業區域への資本の流入は、それが普通利潤（die gewöhnlichen Gewinne）を生ずるに至る迄、或は寧ろ過剰生産の爲め生産物の價格が生産費以下に下降するまでは繼續するであらう。反對に一商品の價格が其生産費以下に下降すれば、資本は此商品の生産から引去られるであらう。……此の資本の逃亡に依て、斯る一商品の生産は……需要に適合し、從つて其價格が再び生産費の高さに引上げらるゝ迄、或は寧ろ……其價格が再び其生産以上に引上げらるゝまでは減退するであらう」（a. a. O. S. 21）茲に所謂生産費が直接間接の勞働費用を意味するものなることは、前述の通りである。

假令マルクスの勞働價値説の出發點が茲に在つたことは忘却して差支ないとしても、抑も資本間の自由競爭の排除せられてゐる處で、抑も勞働費用に由る商品交換の行はるべき筈がない。資本間の自由競爭の行はれぬ處といふは、即ち獨占の存する處に外ならぬ。獨占の存する處に於ては、商品の價格と生産上の犧牲從つて勞働費用との關係が遮斷されることが明白である。需要供給の關係上、商品が犧牲に比して如何に高價に賣買せられても他から競爭者の來り加はつて其供給量を增加せしめ、犧牲（費用）と價格との懸隔を短縮するといふことが出來ないか

らである。故にマルクスも商品が其價値通りに賣買される爲めには、何等の偶生的又は人爲的獨占存せざること」を條件としてゐる。即ちマルクスは自由競爭を一方に於ては價値通りの商品交換を妨げる事情となし、他方に於ては價値通りの商品交換の條件としたのである。

斯の如き自家撞著の根柢には、抑もマルクスの價値が勞働によつて造られるといふ謬想が存するのである。併し乍ら勞働が造るものは生産物であつて價値少くも交換價値ではない。たゞ勞働は生産物を造り出すと同時に、他面物の供給上に忍ばるゝ犧牲である。其故商品の價格が此犧牲に比例せぬ場合には、或は生産の增加或は其減少が促されて、結局犧牲に比例する價格を成立せしめるやうな需要供給關係が造り出されるとは謂ふことが出來る。物の價格を定めるものは何處迄も需要供給關係であつて、たゞ生産上に要せらるゝ勞働が供給を左右するといふに過ぎぬ。決して勞働が價値を生むといふが如く考ふべきものではないのである。マルクス流の勞働價値說の根本的困難も亦た此の需要に關聯するものである。問題は、商品の價値を決定するといふ社會的必要勞働時間とは純生産技術的に解せられた必要勞働時間であるか、或は商品に對する需要が其處に顧慮せられてゐるか否かに存する。

マルクスの說く所に由れば、必要勞働時間は、大概の場合には生産技術的の意味に解すべきものゝやうである。然らば、需要の有無大小を問はず、一定量の勞働は常に同一價値を生ずるものとなすべきであるか。これはマルクスの立場からしても承認し兼ねることであらう。マルクスの謂ふ商品は、何等かの人間欲望を滿たすものでなくてはならぬ　何等の欲望滿足に供すべからざるものは、如何に多量の勞働を投じて生産せられても無價値でなくてはなるまい。既に勞働を費すの必要如何に拘らず、欲望滿足に供すべからざるものは無價値なりとすれば、生産上に同一量の勞働の費されたものは、之に對する需要の强弱如何を問はず、同一の價値を有するといふことも亦た不合理でなくてはならぬ。

併し同一量の勞働が費された商品も、之に對する需要强弱の程度如何に由て其價値を殊にするものとすれば、マルクスの所謂社會的必要勞働時間は全然別樣の

意義を取得し、其價値法則は根柢から動搖せざるを得ないのである。而かもマルクス自身は、或場合明に必要勞働時間は需要を顧慮しての「必要」時間であると言つて居る。即ち資本論第一卷中に「市場の胃腑が亞麻布の全量を一ヤアド二志の正常價格で吸收することが出來なければ、それは全社會的勞働時間中の麻織業の形で費された部分が大き過ぎたことを示してゐるので、各個の麻織りが其の各自の生産物に對して社會的に必要なる以上の勞働時間を投じたのと結果は同じである」といひ（Das Kapital. Volksausgabe S. 678）同第三卷第十章も同趣旨に解せらるゝ文言を掲げてゐるのがそれである。

併し勞働價値法則を斯の如き意味に解すれば、マルクスの學説は特殊の意義を喪失し、商品の價値が其價格を支配するのでなくて、需要供給に由て定められた其價格が價値を定めるといふことになるであらう。即ち右記の例に於ける亞麻布は、生産行程上に於て費された勞働量からいへば、一ヤアド二志の價値を有すべきであるのに、需要に對して、供給過大なる爲め一ヤアド二志丈けの價値を含まぬといふことになれば、一商品は生産上に費さる勞働量如何に拘らず、需要供給關係に由て定まつた丈けの價値を有することになる譯である。

斯の如く變改せられた價値法則を勞働力の價値に適用すれば、何うなるか。勞働者の生活費如何に拘らず、勞働力は勞働者の收得する賃銀だけの價値を有するといふことになるのである。然るに、資本家が實際購入するものは、勞働力でなくて勞働である。成程商品の價値は、その生産に要せらるゝ勞働量であるといひ、而してこれに相當するものを勞働に就いて求むれば、それは勞働者の生活必要費であるといふことも出來やう。而して此の生活必要費に由て謂はゞ生産せらるゝものは、勞働ではなくて勞働力であり、生活費は勞働力を維持するものであつて、給付せらるゝ勞働其者の費用と見るべきものではないが、併し需要者たる資本家の側から見れば、需要せらるゝものは勞働であつて、勞働力ではない。縱令勞働力は同一であつても、十二時間の勞働と六時間の勞働とに對し、若しくは優秀なる勞働と劣惡なる勞働とに對して雇主は決して甘んじて同一報酬を支拂ふものではない。而して既に勞働者の賣却するものが勞働であつて、而して前段の論法に由て、勞働の價値は需要供給關係に由て定まる賃銀額に從ふものとすれば、勞働者は提

供したものと等しき價値を收得するのであるから、搾取といふことはあり得ないことになる。これはマルクスの勞働價値法則を全然無意義ならしめるものである。

生産行程上に費さるゝ同一量の勞働は、生産物に對する需要の有無强弱に拘らず常に同一の價値を造り出すものとすれば、全く無用なる物の生産に投せられた勞働も亦た價値を、從つて餘剩價値、利潤を生むといふの不合理に陷らねばならず、之に反し、マルクスが或場合に認めてゐるやうに、生産上に費された勞働は生産物に對する需要の程度如何に應じて價値を生ずるものとすれば、商品の價値は其價格に由て定まり、勞働の價値は賃銀に由て定まることゝなつて、搾取といふことはあり得ないことになるのである。

社會主義者によるリカアドオ價値論の展開は、マルクスに依て其極點に達し、而してマルクスの價値論は、予の見る所に由れば、リカアドオから離れることに依て失敗に歸して居る。而して其失敗は勞働をば、供給を左右する重要なる一事情と見ることに止めずして、更に其以上の位置を之に與へようとしたことに存するのである。

マルクス及びロオドベルトスの價値論に就いて更に記すべきは、此兩者が殆ど同一の立場からリカアドオの地代論に加へた修正の事である。リカアドオの說に由れば、地代は現耕の土地の地味の差異に由て生ずるものであり、從つて最後に耕作圈内の入つた最劣等地、若しくは最後に土地に投せられた資本は、僅に耕作勞働者の賃銀と資本利潤とを産するに止まつて、其以上に地代となるべき餘剩を生まぬ筈である。マルクスもロオドベルトスも共にリカアドオの認める較差地代の外に猶ほ一般地代若しくは絶對地代の成立し得べきことを說いてゐる。換言すれば、現耕の最劣等地も猶ほ資本利潤以上に地代を生ずるといふのである。而して其理論は、此の二者の勞働價値法則から演繹されて居るのである。

先づロオドベルトスに就いていへば、マルクスの所謂餘剩價値をロオドベルトスは賃子（Rente）と稱して居るが、勞働生産物が其勞働費用に比例して相交換せらるゝ限り、農業に投ぜられた資本には工業に投ぜられた同額の資本よりも必ず多

額の賃子を割り當てられる。それは、同額の資本は、農業に於ては原料を要せぬ故、工業に於けるよりも多量の勞働を雇傭し得るからである。而して普通利潤率は、ロオドベルトスは工業に歸屬する賃子と工業に使用せられた資本との比例に由で定まるものとして居るから、農業收益から農業資本に對する普通利潤を控除すれば、必ず其跡に餘剩が殘る。これが地代である。この地代は地味の差等の爲めに優等地に生ずるものではない。地味の優れた土地は、其優越に比例して劣等地よりも多く地代を生ずるけれども、現に耕作せられて居る最劣等地も猶ほ普通利潤以上の收益を擧げることは右に述べた通りだといふのである。「……原生產物の價値が費用勞働に等しくさへあれば、（リカアドオも亦た最も不利な事情の下に造られた生產物に就いて承認したやうに）一般賃子の前提條件即ち充分なる勞働の生產力及び土地資本の私有――が備はる限り、原生產物の價値は如何に小でも地代は必ず發生しなければならぬ。……實際の交易上に於て少くも價値は費用勞働に等しとの法則に向つての歸向が通則である限り、地代も亦た通則である。地代が生じないで資本利潤のみが生ずれば、それはリカアドオの言ふやうに本源的狀態ではなくて一個の變態（Abnormität）に過ぎぬ」（Rodbertus, Dritter Brief an v. Kirchmann: Widerlegung der Ricardoschen Lehre von der Grundrente und Begründung einer neuen Rententheorie. 1851. S. 100）。

此地代論を反駁することは困難でない。土地に投ぜられた資本が工業資本よりも高率の收益を擧げるならば、資本は工業を避けて農業に流入し、農產物の供給增加の爲め、其に投ぜられた資本が工業資本と同率の利潤を擧げるに止まり全く其以上に餘剩を生ぜぬやうになつて、始めて已むであらう。ロオドベルトスは是に對して答へて謂ふ。斯く地代が消滅し、資本の收益率が工業上農業上に同一となる時は、即ち需要供給の變動に依つて財貨相互の交換比率は其勞働費用に比例しなくなつて居り、從つて地代論の前提たるリカアドオの價値法則が維持されなくなつた時である。「……リカアドオの地代論は、或は彼れの理論全體の根本原則たる、生產物は何れも費されたる勞働に應じて價値を有すとの命題と相容れぬか……、或は此原則を固執すれば、彼れの地代論が謬つてゐるか何れかである」（S. 173）と。

併し此論は、謬つたリカアドオ解釋に基づいて居る。リカアドオの勞働價値說とも謂ふべきものは、利潤率平均の前提の上に立てられたものであつて、而して其の同じ利潤率の平均の爲め勞働價値說が維持し難くなつたことは、リカアドオ自身の充分承認する所であつた。これは予の再三詳論した通りである。

斯く農業への自由なる資本流入を承認すれば、ロオドベルトスの地代論は成立しない。然らば農業への資本流入は何等かの障壁によつて遮斷せらるゝものとしたならば、何うなるか。マルクスの絕對地代論はロオドベルトスの理論に更に主地所有權なる競爭障壁を加へたものだと見て好い。マルクスもロオドベルトスと同じく、同額の資本が農業に於て雇傭する勞働量は工業に於けるよりも多い。即ち彼れの術語を以ていへば農業資本の有機的組織は工業資本の其よりも低いことを認めたのである。（但し其理由は農業は原料を要せぬといふのでなくて、農業生產力が工業生產力よりも低いといふことに求められた）。そこで、若しも農工業間に於ける資本の競爭が自由ならば、農產物は其價値より低い生產價格（費用價格平均利潤の和）を以て賣買される筈であるが、マルクスによれば、地主は如何なる場合にも其土地を無償で他人の使用に委することを肯んじないから、土地が單に其に投ぜられた資本に對して普通利潤を齎すに止まる限りは耕作せられぬ。農產物の價格が此以上に昇る迄は、地主は土地への資本投下を許さず、從つて農產物生產價格以上の價格を以て賣買されざるを得ないといふのである。此價格には當然普通利潤以上の餘剩が含まれる譯である。

併し乍ら、地主は、新に其所有地を耕すことは、之を無償では許可せぬとしても、マルクス自身も認めてゐる通り、既に賃貸せられた土地に累ねて資本を投ずることを妨げ得るものではない。而して農產物の價格と費用價格との間に普通利潤以上の餘剩の餘地が存する限り、資本は既耕の土地に追加して投下せられなければ已まぬ筈である。而して此の資本投下は、最後に投ぜられた資本が纔に普通利潤を擧げ得るに過ぎぬ點に至つて、始めて已むであらう。即ち斯の如くにして農業工業間に於ける利潤率の平均は、依然として行はれ、リカアドオの較差地代論は依然として覆へされずに殘る。

若し又マルクスの如く、資本流出入の遮斷に依つて、即ち獨占によつて較差地代

以外の地代發生を說明せんとするならば、マルクスの價値法則、資本の有機的組成の異同等を引き來ることは、凡て無用である。問題を決するものは、一に農產物に對する需要と地主の獨占的地位の强固の程度如何とであつて、農產物の價格は其生產價格以上如何なる點までも昇騰し得るのである。而して此場合農產物は最早任意に增加し得べき貨物の部類に屬せぬものであるから、從つてリカアドオの費用法則は之に適用せられないのである。農產物が自由に增加し得る貨物たる限り、成立し得るものは獨り較差地代法則のみであつて、絕對地代は與らぬ。

休業銀行に關する法律問題

西本辰之助

休業銀行に關聯して諸種の問題が經濟上からは勿論法律上からも論議されてゐる。私は茲に法律上の見地から二三の點につき卑見を述べてみやうと思ふ。

一　取締役及び監査役の責任

取締役及び監査役の責任に關して商法に次のやうな規定がある。

第百七十七條　取締役カ其任務ヲ怠リタルトキハ其取締役ハ會社ニ對シテ連帶シテ損害賠償ノ責ニ任ス

取締役カ法令又ハ定款ニ反スル行爲ヲナシタルトキハ株主總會ノ決議ニ依リタル場合ト雖モ其取締役ハ第三者ニ對シ連帶シテ損害賠償ノ責ニ任ス

第百八十九條　第百六十四條、第百六十六條但書、第百六十七條、第百六十七條、第百七十七條及ヒ第百七十九條ノ規定ハ監査役ニ之ヲ準用ス

第百八十六條　監査役カ會社又ハ第三者ニ對シテ損害賠償ノ責ニ任スヘキ場合ニ